

タイトル:平成 27(2015)年度 教育セミナー(第 11 回)

日時:平成 27 年 9 月 21 日(月・祝)～24 日(木)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究 3 階 マルチメディア会議室(304)

「人間の移動から読み解く近現代ロシアのムスリム社会」

長縄 宣博 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)

近年、イスラームと近代帝国との相互関係について研究が急速に蓄積されている。それは主に次の三つの論点を軸に展開している。第一に、多種多様な人間集団に権利と義務を分配していく帝国の仕組みとムスリム社会との関係、第二に、国内でのムスリム政策と外交との相関、そして第三に、帝国の統治と諸帝国の接合によって生み出された広大な空間における交通と交換である。本講義では、ヨーロッパ部ロシア東部のヴォルガ川からウラル山脈にかけての地域に少数派として生きるムスリム社会を中心に、上記三つの論点を踏まえながら、19 世紀から 2014 年までの歴史を概観した。

ヴォルガ・ウラル地域は、ナクシュバンディー教団が 17 世紀以降インド洋からユーラシア大陸にかけて展開した紐帯、そして北アフリカからの思潮とも交わった預言者の伝統への回帰を呼びかける改革運動の一角を成してきた。それは、ロシア帝国の膨張とも並行し、ダゲスタン、トルキスタン、クリミアのウラマーとの密な交流も生み出した。その一端は、現在ダゲスタン共和国で公認のナクシュバンディーの道統の中にも刻まれている。

ソ連は、公共空間から宗教を徹底的に排除する無神論の国であったが、しばしば国内のムスリムを外交に活用するという矛盾する政策を採った。戦間期には、帝国主義を掘り崩すために、共産主義とは相容れないブルジョワ民族主義との同盟も辞さなかった。第二次世界大戦前夜までのトルコ共和国との友好はよく知られているが、1926 年にソ連が、サウディアラビアの基となる政体を承認した最初の国となったのも、このようなソ連外交の中に位置づけられる。1943 年以降、国内の信徒の生活はムスリム宗務局を中心に統率され、ブハラのマドラサにはソ連各地から学生が集まった。1944 年からはほぼ毎年 20 名前後のマッカ巡礼団が派遣され、巡礼者は、脱植民地主義の支持、科学と敬虔さの両立、男女平等、富の公正な分配という点で「ソヴィエト的イスラーム」の正当性を確認できた。

ソ連解体前後の 1990-92 年には、再び中東への留学の道が開かれた。マッカ巡礼は、ロシアのアラブ外交をはじめ、内政面でもムスリム有権者に訴える手段として、また 2014 年にはクリミア併合の後押しとして無視できない役割を果たしている。他方で、ソ連時代に育った宗教指導者は自身の權威を守るために、「伝統的イスラーム」を外来の原理主義「ワッハーブ主義」に対置させる言説と政治を發達させている。確かに、ヴォルガ・ウラル地域にもイスラーム急進派が広まり、90 年代後半にはチェチェンやアフガニスタンに「ヒジュラ」の目的地とする者がいた。現在は「イスラーム国」が新たな目的地になっているという見方もある。しかし、そうした情報の背後には、現地のムスリムを十分に統制していないように見える地方政府に対して連邦中央が加える圧力も読み取ることができる。